



ロバの音楽座

Roba Music Theatre

ハーディ・ガーディ (鍵盤付き擦弦楽器)、リュート (16世紀ごろの撥弦楽器)、ブサルテリー (中世の箱琴)、クルムホルン (ルネサンス時代のリード楽器) などの中世・ルネサンス時代の古楽器、世界の民族楽器、手作りの「空想楽器」などを駆使して、子どもから大人まで、聴く人を音と遊びの世界へといざなう「ロバの音楽座」。そのファンタジックで温かみのあるステージは、絵本から飛び出した楽団を思わせる。昨年、10枚目となるCD『森のオト』を発売。今年は、結成30周年イベントも計画中だ。

写真提供／ロバの音楽座

P.24 ◀

ロバの音楽座

Roba Music Theatre ■ 古楽グループ



ロバの音楽座の中心メンバー。左から、上野哲生(リュート、サントウール、プサルテリーなど)、富田りぐま(足踏みオルガン、ポルターティーヴ・オルガン、コンサーティーナなど)、大宮まふみ(リコーダー、フルート、ボウドプサルテリーなど)、松本雅隆(バグパイプ、パンパイプ、クウムホルン、ハーディ・ガーディなど)

子どもたちと 千年の記憶

中世・ルネサンス時代の古楽器が柔らかな音色を奏で始めると、たちまち赤ん坊が泣きやんだ。まるで魔法にかかったように子どもたちがステージに釘づけになり、音に反応して笑い、踊り、歓声を上げる。民族楽器や手づくりの「空想楽器」、歌も加わり、時には仮面劇も交えて展開するステージ。気がつけば子どもたちだけでなく大人たちも、すっかり音と遊びの世界に引き込まれていた。

「古楽」難解、という雰囲気が好きではないんですよ」と微笑むのは、今年で30周年を迎える古楽グループ「ロバの音楽座」リーダーの松本雅隆だ。子どもたちと音楽の素晴らしさを共有しようと1982年に誕生した同楽団。しかし、結成当初は「古楽器の演奏会なんて子どもには難しすぎる」との理由で、どこの幼稚園・保育所でも門前払いだったという。

「でも、子どもたちには先入観というものがないんです。彼らの判断基準は、おいしいか、まずいか(笑)。心で聴いてくれる、ありがたい聴衆ですね」

古楽器は、現代の楽器に比べて音域が限られており、音量も小さい。

「私たちの音楽は足りないものだらけでも、だからこそ、子どもたちは想像の扉をボンと開いてくれる」

そんなロバの音楽座が結成当初から目指しているのが「絵本のような音楽」だ。「音楽の世界では『上手い』『下手』という表現が本当によく使われます。でも、

絵本の世界は、らくがき風のものから芸術的なものまで表現の幅が広く、魂がこもってあれば心に響く。「大人向け」「子ども向け」といった線引きをしないのも『絵本的』かもしれないね。音楽は特定の誰かのものではない、みんなのものだから」

好奇心にあふれた子どもたちの姿を見ていると、彼らを取り巻く環境がどれほど大きく変わっても、その感性は太古の昔から何ら変わっていないのでは、と感ぜずにはいられないという。

「ステージの後、3〜4歳の小さな子どもがトコトコ近づいて来て『懐かしかった』と言うことが何度もありました。この子たちが生きた3〜4年間の経験、それを超える千年、二千年前の潜在的な記憶が、もしかするとわれわれの音楽によって呼び覚まされたのかもしれないね」

急ぎ足の社会に対するアンチテーゼ

70年代初め、国立音楽大学で教育音楽を学んでいた松本は、利益・効率優先の当時の社会に反感を感じ、子どもの感性を育くむ音楽の世界に「違う流れ」をつくりたい、との思いを強くしていた。迷い、悩む日々の中、大学の楽器博物館で出会ったのが古楽器だった。おとぎ話から抜け出たような不思議なフォルム、木のぬくもり、素朴で懐かしさを感じる音、そのすべてに心を奪われた。

しかし、当時は古楽器の奏法を教えてくれる師匠はもちろん、楽器も資料もほ

とんど無かった。

「海外の古楽雑誌に掲載されていた小さな記事を頼りに、ヨーロッパへ渡りました。アポイントも取らずに現地の製作家や演奏家を訪ね、さまざまな出会いの中で、楽器や奏法について少しずつ学んでいったのです」

楽器のルーツを辿るうちに、音探しの旅は中東やアジアにも広がっていった。

「あれから40年。今でも音探しの旅は続いています。ロバの音楽座が生まれたのは旅であちこち寄り道したおかげです(笑)」

急ぎ足の社会に対するアンチテーゼは、「ロバの音楽座」というグループ名にも込められている。

「ロバは、かつて中世の東西貿易で大活躍した、いわば文化の担い手でした。ところが、交通手段の発達に伴って次第に社会の片隅へと追いやられ、いつしか『うすのろ』『まぬけ』の代名詞になってしまった」

それは、隆盛を極めながら、モダン楽器の出現とともに忘れ去られていった古楽器の運命とも、どこか似ている。

「中世の吟遊詩人がロバのことを歌った歌があります。長旅を終えて眠りについたロバ君が、大好物の夢を見て嬉しくなって歌った。それは下手な歌だったけど、すべての人をやさしく包んだ、とそこには、ロバ君のようにゆっくり歩いていこう、音楽は上手下手じゃなくて心をこめて歌い奏で楽しむもの、人を幸せにするものだ、というメッセージが込められているように思います」

日本中に暗い影を落とした東日本大震

古楽器、民族楽器、空想楽器で紡ぐ「絵本のような音楽」

Profile

ろばのおんがくざ

1982年、中世・ルネサンス音楽を演奏する「カテリーナ古楽合奏団」(73年結成)を母体に結成。東京・立川のロバハウスを拠点に、古楽器や空想楽器を使った、音と遊びの世界を全国の子どもたちに届けている。NHK教育のアニメ「パンツばんくらう」「からだであそぼ」の音楽担当。スタジオジブリのアニメ「ゲド戦記」の音楽にも参加。山下洋輔や谷川俊太郎とも共演している。手づくり楽器のワークショップや、子どものための音楽合宿「ロバの学校」などのイベントも開催している。公演・CD情報など詳細は公式サイトを参照。
<http://www.roba-house.com/>

演奏会情報

■「ガラン・ピー・ボロン音楽会」

5月12日(土) 11:00 ~、15:00 ~
北とびあ さくらホール(東京)
《問》北区文化振興財団 03-5390-1221

■「らくがきブビビのコンサート」

5月20日(日) 15:00 ~
横浜市泉区民文化センター
テアトルフォンテ ホール(神奈川)
《問》横浜市泉区民文化センター
テアトルフォンテ 045-805-4000

■「愉快的コンサート」

6月16日(土) 11:00 ~
豊洲文化センター レクホール(東京)
《問》豊洲文化センター 03-3536-5061

災、そして、それに続く原発事故。しかし、「あの不幸な出来事の後、人と人のつながり、自然や音楽の素晴らしさ、そして忘れかけていた何かが、みんなの心に再び戻ってきているのを強く感じます」と松本は言う。ロバの音楽座が作り出す音は、これからも子どもたち、大人たちをやさしく包み、夢見ることの大切さを伝えてくれるはずだ。

